

責任とリスポンシビリティ

哲学者の鷲田清一氏が「責任」と「リスポンシビリティ」について興味深い考察をしていました。「責任」という言葉は、「(責任を)問われる」「(責任を)取らされる」といった受け身の感覚を伴います。組織や集団の一員としての覚悟や使命感も滲み出ている感じですが、このように日本では、「責任」は“相応の重み”をもって受け止められている言葉です。

一方、「責任」を英語で表した「responsibility」の語源を読み解くと、「respond」と「ability」で構成されています。つまり、「相手の求めや促しに、いつでも応じる用意がある」ということです。言い換えると、「相手が求めているものを自然に受け止めて処理できる力」とも言えます。

このことを学校や教師に当てはめて考えてみます。

「教師としての使命や責任」という言葉をよく聞きますが、ともすると必要以上に教師の負いや作務につながってしまうことも懸念してしまいます。「子どものために何としても～するべきだ」「子どものために～しなければならない」といった感覚です。この気持ちが高じ過ぎると、子どもにとって心理的な負担感や圧力を感じてしまうことがあるかもしれません。

鷲田氏は、ケアの世界では、援助者との関係性には「ほどよい距離」が必要だといいます。教師と子ども、保護者と子どもの間にも、こうした距離感は大切になると考えます。過剰な干渉や放任は子どもの自立や成長にとって妨げになることもあります。教師や親にとっては、「待つ」姿勢や「見守る」姿勢が問われているのではないのでしょうか。

もう一つの視点として、教師と子ども、親と子どもという直線的な関係だけでなく、「ナナメ」の関係として存在する他者が必要だと考えます。昔は、家族や地域社会の中にこうした役割を担う人が身近にいました。共に暮らす祖父母であったり、近所のおじさん、おばさんであったりです。しかし今はこうした他者が子どもたちの身近な存在として見えにくくなっています。

子どもの成長のために必要な第三の他者の存在を願うことは難しいですが、たとえば地域の行事やボランティア活動などに参加すれば、異年齢や異世代の方と交流する機会が生まれます。学校や家庭では難しい多様な価値観に触れられることは、子どもにとって新たな発見や救いをもたらすこともあるはずですが、こうした「多様性を保障する教育活動」を意図的に仕組んでいくことも益々重要な時代になると思っています。